坪田譲治全集 6

新潮社

坪田譲治全集　第六巻

印刷　昭和五十三年三月十五日

発行　昭和五十三年三月二十日

著者　坪田譲治（つぼたじょうじ）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

電話　東京（〇三）二六六―五一一一　業務部
二六六―五四一一　編集部

振替番号　東京四―八〇八

印刷・株式会社　金羊社　製本・大口製本株式会社

定価　二八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© JÔJI TSUBOTA Printed in Japan 1978

坪田譲治全集 第6巻 目次

老いては　八
老人独白　三
こわがり屋　三四
姉　五三
老年の歌　六五
昨日の恥　七六
昨日の恥　今日の恥　八三
手術　九六
借金について　一〇八
道則　妖術を習うこと　一一〇
息子シカル　一一二
まずお爺さんの話　一一四
兄弟仲よく　一五三
あいうえお　一六四
虚々実々　一七五
うちきもの　一八五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もののはずみ　一九五
七十の風景　二〇六
賢い孫と愚かな老人　二一七
秋の夜ながに　二二七
マスコット　二三七
ぼけた老人とぼけぬ老人　二四七
ものを捨てる　二五八
後悔先に立たず　二七二
涙を流す　二八二
不安な季節　二九二
親友妹尾正男　三〇四
橋　三一八
昭和五年四十歳　三二四
小説尾崎士郎　三三四

*

あとがき　坪田譲治　三五一
編集後記　三五五

（箱カット・中尾彰）

坪田譲治全集 第6巻（小説六）

賢い孫と愚かな老人 他

老いては

私は六十八になりました。日本人は永生きをするようになったと言われますが、然しあと二十年も生きられるようには思いません。三年か、五年か。こんなことを思うのですが、そこは神さまが、老人のために配慮されたものか、余命を三年だの、五年だのと、ちょっと思っては見るものの、それが実感となっては来ないのです。実感から行けば、十の時、二十の時、三十の時などと少しも変りません。いつ迄生きるとも解らない感じです。

つまり、死ぬるという実感がないのです。

それはそうですが、人間感じばかりでも生きて居りません。理知というものがあります。その理知という奴で考えて見ると、私はあと、せいぜい十年というところではないでしょうか。歯は六本しか役にたつのがありませんし。肺は二十三の時、浸潤というのをやりましたし。胃は、十の頃から胸やけに苦しみ、今は癌ノイローゼで、年に二回三回、レントゲン診察を受けないことはありませんし。お医者さんには、年四回やって来いと言われて居りますし。その他、心臓も悪ければ、前立腺肥大なんていう恥ずかしい病気もあります。これは老人病で、小便が出にくくなる病気なんです。

こんなことを書いていてはキリがありませんが、とにかく、理知的に先は短いと考えた次第であります。先が短い、生命はもう余りない。そう思ったところで、

「さて、そうなって来たら、どうしたらいいんだろう。」

ある日そう私は考えたのです。どうしたらいいと言って見たところで、これをどうするわけにも行きません。実のところ、私はこの上、十年二十年と生きたがってるわけではないのです。今の希望、生きてる間に、何か望みのものはないか。人に聞かれたら、私の望みは、実は月の世界を見たい。火星を見て来た人の話を聞きたい。その写真を見たい。出来れば、宇宙人なんて、どこかの星に住んでる人間のことを聞きたい。空想でない、その実見談を、生きてる間に聞きたい。ま、そんなところです。そうして見ると、私の願いなんてものは、昔の人が、親のカタキを討ちたい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だの、故郷へ帰って死にたいだのと考えた、そんな切実なものではありません。

それでは余り童話的ではないか、童話を書くからと言っても、子供らし過ぎるではないかと、言われそうです。作家なら、作家らしく、少しは思想的な考え方をしろ。そうも言われるかも知れません。そこで実は考えたことがあるのです。私は二十代に、一二年でしたが、「人生とは、どういうものであるか。人間はそれをどんなに生きなくてはならないか。」そう考え考えして、その頃はやりの人生問題に煩悶したことがあります。「人生の門出を、無計画に出発するということはない。それでは、これからの一生をメクラ滅法生きることになる。」そう思ったのです。

それで煩悶ということをしたのですが、如何に生きるべきかが、解る筈のものではありません。解らないうちに、兵隊にとられ、肺浸潤になり、結婚をし、子供が生まれ、それから甚だしい貧乏をして、というようなわけで、人生は忙しくて、計画どころでありませんでした。何でも、かんでも小説も書かなければ、童話も書かなければと、あくせくしているうちに、五十年近い月日がたち、六十八になってしまいました。

どうしましょう。今さら、もう計画どころでありません。人生は終ったのです。幕がおりようとしているのです。そこへ、これから脚本を書くからな、なんて言うようなものなのです。それよりも、今、大切なことは、そうではありません。今こそ、人生はどんなものだったか、これを言うべきです。それを考えるべきなのです。この間、畑の中をステッキをついて散歩していて、実は、こう思いあたったのです。

で、これから、その人生とは、このようなものでありました、ということになるのですが、何ぶん、昔からやかましい人生のことです。「なるほど、そうだったか。」なんて言われるものが書けるとは、素より考えて居りません。つまりは、自分のための覚書のようなものです。では――〃

どうも言いにくいことですが、私に女のあったことを言わないでは居れません。私が二十三四、四十五年ほど昔です。肺浸潤で、療養所にいた頃のことです。そこの見習看護婦と恋愛を致しました。恋愛したというほどのことでもないのです。とにかく、二月三月の間のことです。

元来、私はピューリタンのように思われて居ります。いや、思われていないかも知れません。私が自分で思っているばかりです。

「みんな、おれをピューリタンのように思っているらしい。」

こんなことです。いずれにせよ、昔、女とそんなことがあったのです。どうも、相すみません。おゆるし下さい。誰に許しを乞うというのでもありませんが、どうも、こう言わないと、すまないような気が致します。然しホントのことを言うと、私が誰にも言わず、この五十年近い歳月、ひた隠しに隠していたわけではないのです。その頃の療養所の友達は大抵知って居ります。また、その後の文学の友達も何人か知って居るのです。永いつき合いの親しい友達には言ってあるのです。家内にだって言ってあります。家内にだって、どころではありません。この人こそ、言っておかなければならない第一の人です。だから、婚約をする時、そう打ちあけました。家内は、それに対して、別にどやこう言いませんでした。その時は言わなかったのですが、その時から三年、或は五年くらいは、それが私の弱点となりました。何かと言うと、家内は、

「言いますよ。言いますよ。」

そう言って、私を驚かします。その事を言うというわけなのです。例えば——。

家内も私の前に婚約者がありましたが、それは、アメリカへ行っていました。何でも村の模範青年で、アメリカへ行くにあたって、家内と婚約したのだそうです。そうしておけば、アメリカで間違いも犯さず、何年かの出稼ぎも無事に辛抱して、金をためて帰ってくると思われたからだそうです。その時、家内は十八だったと言います。私と婚約した時、彼女は二十五か六だったと思いますから、その模範青年との婚約後七八年たってるわけであります。そういうことは、然し私としては、気に懸るもので、婚約の時も、結婚後も、時々彼女に聞いて見ました。それというのも、療養所にいる間、彼女の良人はアメリカにいるのだと、みんな思っていました。そして彼女が、その良人に向かって、せっせと手紙を書くというのが評判になっていました。それをひやかしたり、からかったりする中年の女の人の言葉を、私は度々聞いたことがありました。それで、私は、そこのところを糺したわけであります。それに対し、婚約の時、彼女は、

「遠い昔のことで、今は関係ありません。昔だって、ただ口約束だけのことで、軽い話だったのです。」

こう言いました。婚約の時と言えば、私は彼女を尊敬し、そして遠慮している時ですから、

「そうですか。わかりました。」

そんなことを言って、すましてしまいました。然し結婚して、遠慮がなくなると、そう行きません。つい、療養所のことが口にも出て来ます。

「あんたがアメリカへ度々手紙を出すというので、Aさん

だったか、Bさんだったか、あんたをひやかしてたじゃないか。」

そう言うようになりました。すると、彼女は言うのです。

「それじゃ、いいですか。私も言いますよ、いいですか。」

この調子です。私は一ぺんに参って、

「いや、わかった。わかった。私がわるかった。」

こういうことになって来るのでした。これでは、私が弱点ばかりを家内に握らせたことになりますが、私がそんな告白をした時は、至極まじめな気持からだったのです。従って、家内からも、それに相当した心を割った応対があるものと考えていたのです。それが無かったと、今頃気がつくのですが、これは五十年も遅い気のつき方です。

家内は生れるときから、キリスト教の家に育ちました。学校だって、ミッション・スクールを出たのです。だから、私と結婚以来のその五十年近い年月を、聖書と讃美歌を身辺から離したことはありません。机の上か、側の戸棚の中か、そんなところに置いていました。然し不思議なことに、彼女が聖書を読んでるのを見たことがありません。讃美歌も歌ってるのを聞いたこともありません。それでいて、育ちとか、教育とかいうものは不思議なものです、彼女は見るからに、クリスチャンなのです。

「奥さまはキリスト教ですか。」

家内については、何も知らない私の友達が、一目彼女を見ると、直ぐそう言うのです。それが一人や二人ではありませんでした。つまり彼女はキリスト教の着物を着て、キリスト教の髪を結っているということです。カミ、カタチ、服装がキリスト教なのです。

然しその昔、私はその家内を天使のように清浄無垢と信じていました。私が家内と結婚したのは、その清純な霊と結婚したのです。そう考えて居りました。だから、私が何かきくと、その頃、彼女は冗談めかして、

「おバカさん、そんなことを聞くものじゃありません。」

まず、そう言うのでした。それでも、まだ追求すると、さっきの話です。

「そんなことを言うと、言いますよ。いいですか。」

これで、私は直ぐ降参して、

「ごめん、ごめん。」

というわけです。然し五十年たつと、形勢は違って来ます。家内も、「言いますよ。」とは言わなくなりました。聖書や讃美歌はまだ側においてるようですが、私は別にそれでどうって事はありません。昔、時計のクサリに、メダル代りに、金や銀の十字架をぶら下げてる人がありましたが、家内の聖書もそんなものであろうかと思います。

ところで、家内は天の使のように清浄無垢なためか、大変子供らしいのであります。私から見ると、まるで気がきかないで、てんでボンヤリなのであります。結婚後間もない頃のことです。本屋へ雑誌か何か買いに行ったのですが、買わずに帰って来ました。その時彼女は、

「これ戴きますよ。」

そう言って、十円サツを出し、側の雑誌の上に置いたのだそうです。そして、ちょっと他の本を見ていたら、もうそのサツが無くなっていたというのです。店員がとったのでなく、店にいた客の誰かが、家内のよそ見をみて、持ってったらしいのです。それで家内は、どこか、その辺に落ちていはしないかと、足もとのあたりを見廻したそうですが、何も落ちていなくて、手ぶらで帰って来ました。こんなに子供らしいのです。

それはまだ好いのですが、一度、道に迷ったことがありました。その頃、私たちは雑司ヶ谷の墓地の南に住んでいました。そこは田圃の中で、前にも後にも、稲田畑などありました。市電は大塚仲町を通っていて、バスなどありませんでした。そこで、山手線の池袋か、目白の駅で下りて歩くか、今の護国寺の先の仲町から歩くかという有様だったのです。で、私たちは二月に結婚したので、三月か、四月、割合温かい日のことです。彼女は千住へ出かけて行きました。昼前のことです。仲町から出かけたと思います。千住には家内の姉一家が住んで居りました。どんな用事で出かけたか忘れましたが、

「成可く早く帰って来ます。」

そんなこと言って出かけたように覚えて居ります。こういう時、何時に帰りますなんて、ハッキリしたことを言わないのが、また家内の性質なのです。そんなところも、子供らしさのせいで、ボンヤリしているたちなんです。で、ヒルメシは、私はそばか何か取って食べたんだと思います。晩めしは、ちょっと遅らせた後、家内の分もと、私がメシをたき、何か煮ものなんかして、お膳をつくって待っていました。六時になり、七時になり、八時になり、しても帰って来ません。何度か、門の外へ出て、そこで立っていたり、右左歩いて見たりなんかもしたのです。その末、八時頃には一人でメシをすましたと思います。十時には床なんかとって、なんていう有様です。何ぶん、新婚間もない頃ですから、こんなことだったと思います。然し彼女は帰って来ません。十一時、十二時。もう電車はなくなったが——。これから千住へ行くわけにも行かないし。頭がのぼせて、心配したり、ハラを立てたり、それこそ、ホントに、立っても坐っても居れない気持でした。一番心配したのは、途中で暴漢にあいはしないかということでした。一時過ぎ、

いや、もう二時に近かったのでしょうか。門の戸があきました。そして玄関の戸があくと、彼女の不思議に明るい声です。

「どうもすみません。心配なさったでしょう。ずい分、お待ちになった。」

「どうしたの。」

私は、大変思いつめていたもので、こんな短い言葉しか出ません。

「道に迷いましたの。」

「どこで。」

「墓地の辺です。歩いても、歩いても、知ったところへ出ないんです。」

そう言いながら、彼女はちっとも疲れた様子もなく、至って明るく、至って上機嫌なのです。今でこそ、これは不思議でならないし、何時に千住を出て、どこで電車をおりて、どこをどうして家へ帰りついたか、聞いて見ればよかったと思います。然しその時は、家の天使が無事に帰って来た喜びで、私の心も一べんに晴れ渡った時です。それに天使の言葉にミジン疑をもつような失礼なことは許されないと、私は自分の不純な心を叱りつけて、

「まあ、然し無事に帰れて好かったねえ。疲れなかった？ごはんはどうしたの。」

そう言って、家内をいたわった次第です。家内は元来、自分のことは余り言わないタチなのです。だから、その日、千住の姉のうちがどうだったか、さえ言いませんでした。何時に千住の家を出たなんてことは、素より言いません。それにしても、私はこの結婚して二月くらいにしかならない花嫁さんを、千住から雑司ヶ谷へ帰すのに、夜十一時なんてことはあり得ない、これはその時考えたか、今、考えるのか解りませんが、十時に帰したとしても、四時間かかって居るのです。九時とすれば、五時間。八時とすれば六時間です。晩めしを食べさせて帰すのが、普通でしょうから、そうすれば、八時が常識的な考え方です。すると、彼女は千住から雑司ヶ谷へ帰るのに、六時間かかって居ります。六時間かかれば、おそい彼女の足をもってしても、歩いて帰れる時間です。私なんかでしたら、二時間くらいの道のりでしょう。それを市電で帰ったのですから、上野で乗りかえて、大塚行で、仲町で下りて、それから歩いて十五分です。それを、どこを、どう道に迷って、この時間をかけたのでしょう。十時に千住を出た、或は十一時に出たと解しても、とても解釈のつかない時間なのです。私が、そんな疑念を叱りつけ、叱りつけしたのは、さっき書いた通りです。それが四十年経った今、まだ消えない疑として、心に残って居るのです。これは私というものが、どんなに

疑深く、どんなに天使に遠い不純な心の持主かというショウメイのようなものであります。

ホントは、それから二十年ほど経った時、私はそんなことをスッカリ忘れていたのです。それなのに、彼女はまた道に迷ったのです。今度は昼間でした。十時頃でしょうか、椎名町だったか、東長崎だったか。私の家はその頃、目白にありましたから、歩いても二十分ばかりの処へ行くのでした。彼女は三度も、四度も行ったことのある家でした。つまり私たちの仲人の家なのです。そこへ出かけて行きました。ところが、三時になっても、四時になっても帰って来ません。昼間のことですから、私はちっとも心配なんかしていません。そうしたら、晩めし前に帰って来ました。それで私はやはり、ちょっと聞いて見たのです。

「どっか寄ったの。」

「いいえ。」

「ずい分時間がかかったじゃないか。」

「ええ、道に迷ったんです。どうしたんだか、解らなくって。」

こんな調子で、彼女は非常に上機嫌です。こんな時、いつでも上キゲンなのが、フシギな彼女のならわしです。それにしても六七時間かかって居ります。昼間、椎名町へ行くのに、狐にばかされでもしなければ、三時間も四時間もかかる筈がありません。それというのも、その訪ねる相手が、仲人の家と言っても、仲人の老人夫妻はもう亡くなっていました。今はその令息夫妻の家なのです。そこで四時間も五時間も、食事時を中にして、話があるとは思われません。平常、つき合いというほどのつき合いもない間柄なのです。然し、これもまあ、たいしたことでもないので、私はそのまま忘れました。

ところが、それから五年ほど経ったのでしょうか。やはり、十時頃、彼女は新宿へ出かけました。今日はちょっと買ものがあって、デパートへ行って来ますと、言うのです。

「いってらっしゃい。」

私は言いました。これも私は心配もせず、別に、気にもかけませんでした。然し二月頃の寒い日でしたので、こんな寒い日に、どこでどうしているか、カゼでもひかなければ好いがと、そんなことを思ったりしました。すると六時頃でしょうか。それとも、もっと早く、五時だったかも知れません。風に吹かれたと見え、赤い顔をして帰って来ました。いや、頬は赤いのですが、他の部分、クビや、アゴの下あたり鳥肌になっていました。

「唯今。」

と言って、私の部屋へ来ました。

「どうしたんだい。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com